

図 34

「システムからプロセスへ ー市民性教育と生涯学習ー」 牧野 篤(生涯学習基盤経営コース)

はじめに

学校のカリキュラムの問題に関しては、申し訳ないのですが全くの門外漢です。頂いたテーマも「市民性教育と生涯学習」で、専門としているのが生涯学習なので、その観点からお話をさせていただきます。

実はこの前、私のゼミに参加している院生から、こういわれました。「生涯学習は、胡散臭い」。自分が理解できないものを胡散臭いという精神は、腐敗していると思いますが、胡散臭い生涯学習から見ると、カリキュラムがどう見えるかという話をさせていただきます。胡散臭さの原因は、生涯学習がこれまでの教育学でいわば所与とされていた〈わたし〉というものを、疑っているからです。しかし、私の経験では、今の若い人たち、とくに大学生や高校生たちは、この〈わたし〉をめぐる、極めて苦しい「自分探し」を行っているように見えます。そして、それは、このシンポジウムのテーマである「市民性」と深く関わる問題ではないかと考えています。

学生のレポートから

このようなことをレポートに書いてくる学生が私の担当授業では増えてきています(図 1,2,3)。例えば、リストカット、統合失調、または解離という自我のあり方に関わる問題を、彼らが抱え込んでいるということです。

「私の周りには、自分を大切にできない子が多くいます。……その中でも、高校一年生の頃からの友人で、リストカットを一〇〇回以上繰り返す子との関係の持ち方については、考えさせられました。」「その子は、中学校の頃のいじめがトラウマになって、高校一年の夏から不登校になりました。人格が解離して、突然言葉遣いが悪くなったり、幼児に戻って「何でお化粧するの？幼稚園でしょ」などと言ってきました。その後、つきあっていた彼氏とも病気が原因で別れ、さらに荒れました。保健室登校まで何とかもってこれて、私は彼女と昼お弁当を外へ食べに行っていました。私たちが、卒業すると同時に、彼女は学校を辞めました。」

図1

「彼女からは、昼夜かまわず電話がかかってくる。メールも毎日きます。過食気味の最近では、毎日体重の報告メールがあります。彼女は、友人とうまくいかなかったり、恋愛でふられたり、アルバイトをはじめて上手くいかなかったり、そのたびにリストカットをします。この間は、リストカットした腕の写真をメールで送ってきました。共感的な他者として私がいることで、自分を認識できるのでしょうか。どうしたらよいのかわからなくなっています。」

図 2

私の友だちは、リストカッターです。自分でもわからないけど、なんとなくリストカットをするのだといいます。やめられないです。

図 3

今、私たちとくに若い世代の人々が直面している大きな問題としては、〈わたし〉をこの社会の中できっちり位置づけ、意味づけていくことが困難になっていることがあるのではないかと、まず感じています。

社会で生きるということ

こうしたこととの関わりで、問われなければいけないのは、社会で生きるとは一体どういうことかと

ということだと思います。私たちの観点からすると、人々は他の人々との間に生きることによって、事後的に自己を認識しています。私と皆さんとの関係もそうですが、私がここにいて、お話をさせていただいている、このプロセスで、私が皆さんの反応を見ながら、どう変わっているのか、どう自分を変えていくのかということを手で認識し、さらに、その次に私をどう表出するのかという、インタラクティブな関係の中で、私が存在している、そして、それが私によって意識化されていくという構造をとっているはず。その意味で、他者が存在することによって、無意識の行動が意識化されていく、その過程で自己を発見しながら次の自己につなげていくという関係が、〈ことば〉を媒介しながら、なされているという関係があるはず。

それはもう少し言うと、想像力の問題、さらに私たちが〈ことば〉を使うということと深い関係があります。〈ことば〉は私のことばでありながら、実は私のものでないという性格を持っています。だからこそ、〈ことば〉を使うと、皆さんにもわかるという関係の中で、私は自らの〈ことば〉を使うことによって、皆さんに私を（贈与）している。そこに、皆さんから応答があることで、ある種の交換関係に入っていく。その意味で〈わたし〉は〈わたしたち〉であるからこそ〈わたし〉であるという関係が、この社会にあったはずなのです。どうもそれが機能不全を起こしているのではないかとことです。

例えば、私たちの生きているこの社会は、近代産業社会、近代国民国家といわれるものですが、これは均質性を前提にしながら、階層性、秩序性を持っているものです。そして、それはまた、ある意味で、国家・社会と人格と「知」が、相互模倣性を持ちながら形成されているような、秩序化・序列化された均質な社会です(図4)。

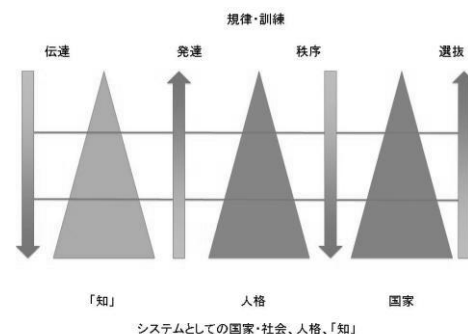


図4

そして、国家が「知」を分配しながら人格を形成するような形で、要するに学校というシステムを通して、私たちが一つの人格または労働力として社会に分配されていく、ある意味で自立と分配を前提にした社会です。

そこで、私たちは均質化されていき、一様序列性の、相対化の中の競争に巻き込まれていく。こういう状況が一方であると思います。

この過程で、私たちは、序列性という問題とともに、空間に位置づけられることによる管理を受けています。図5のように、例えば町村制や自治会という行政システムは学校の校区と重なっており、さらにさまざまな自治組織と重なっていて、その上で企業やボランティアな組織と重なって、そこに個人が存在しています。背景に三角形が見えますが、この中で私たちは住民として位置づけられながら、序列的に自己を形成していくような形で管理されるという仕組みになっています。

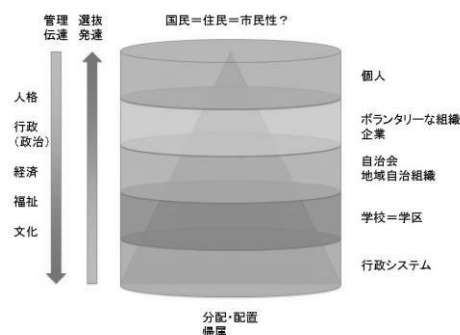


図5

その結果、図 6 の上の方ですが、学校や経済、国家というシステムの中で競争が起こることになります。最初は「知」へのアクセス、または機会の平等を保障して、人々を均質化する。そうすることによって社会は安定しますが、その均質化の中で競争が起こり、社会は動揺していく。そのときに、従来見えなかった不利益層を、このシステムの中に供給することによって、社会をさらに安定・均質化し、競争を促し、それが再び不安定になってくることで、さらに人を供給するという形で、ある種の拡大再生産の循環をつくるために機能してきた、それが社会教育・生涯学習の一側面でもあります。

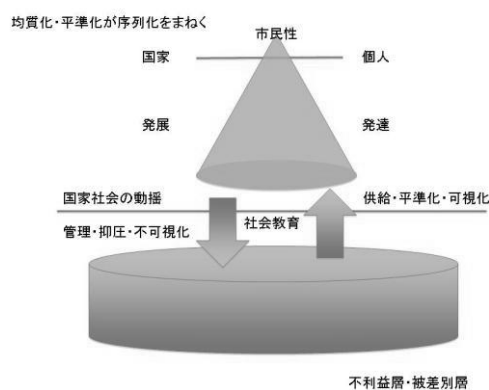


図 6

〈わたし〉形成の困難

今、この循環が壊れ始めています(図 7)。例えば先ほど紹介しました〈わたし〉をとらえられず、苦しんでいる子どもたちの状況は一つの現れでしょうし、また、近年の平成の大合併などにおける空間の解体、つまり地域自治組織の解体による人々の生の不全化があります。さらに、自己責任論における社会秩序の解体が起こってきています。

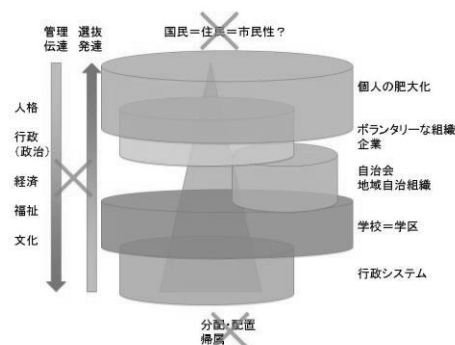


図 7

こういう中で、〈わたし〉を形成することが困難になってきているのではないのでしょうか(図 8)。もう少しいうと、何ものでもない、どこにも位置づけることができない〈わたし〉を生きることの困難というものが、子どもたちや私たちを苛んでいるのではないかと受け止められます。

〈わたし〉形成の困難

社会の中間集団と地縁結合が解体
システムへの帰属による〈わたし〉と〈わたしたち〉の形成が不全化

= 自我形成の不全化

「つながっている」感覚の消費へ
(『エヴァンゲリオン』、ニコニコ動画など、
物語消費からデータベース消費へ
携帯電話の即レスなど)

「いま・ここ」性を超時間・超空間的に「いつでも・どこでも」

図 8

ここに消費を促す新しい手法として、ニューロ・マーケティング(図 9)が社会的に採用されています。それは、無意識や、理性の裏にあるものをいじりながら、ある意味で好き嫌い、自己を嗜癖化するといいますけれども、自分を癖にしていくなような形、自己中毒を起こさせるような形で物を売っていく仕組みですが、そういうものが採用されているのです。

ニューロ・マーケティング
自己の多重化

対象の複製だけでなく、主体の複製が可能となる

+

デジタル・メディア革命
=本質と現象の区別消滅
現実と虚構の区別消滅

システムとしての社会とそこに生きる自己という存在の曖昧化

図 9

さらに、アーキテクチャという、人々の行動を無意識の領域で誘導するような手法が社会的に開発され、導入されてきています。

社会そのものが、人々の自我を多重化していくような状況に入ってきているのです(図 10)。

前のスライドに「デジタル・メディア革命」とあります。従来だと、本質があり、その複製という形で商品が提供され、私たちはそれを消費してきました。今、デジタルの時代には本質がなくなっていくます。もたがなくて、複製が新しい形でどんどん複製を起こしていきながら提供されて、それを購

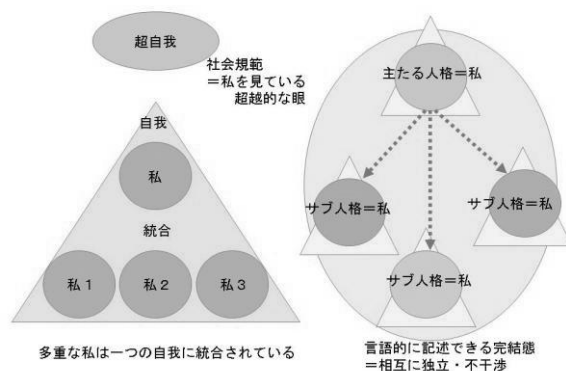


図 10

入する私たちも実は複製が可能になっているのです。詳しくはいえませんが、主体そのものの複製が可能となる時代なのです。私たちは、膨大なデータベースとして社会的に管理されています。例えば、私がアマゾンを使うだけで私の本の嗜好が全部取られていきながら、牧野という人格を当

てにしないで本を売るといふ経済行為に巻き込まれていく状況が出てきています。システムとしての社会とそこに生きる〈わたし〉という存在を曖昧にするような時代になってきたのではないかと思います。

この意味では、従来のような近代産業社会、近代国家における自我を前提とした、「知」の分配システムとしての教育の基盤が崩れていく時代に入ったのではないかと。相互模倣性をもって構築されている国家・社会、人格、「知」というものが、ある種、秩序性を失いながら流動化していく時代に入ったのではないかと考えています。

そこでは、例えばシステムとしての国家や社会、「知」、人格、自我というものが解体を始めて、フローになっていきます(図 11)。いい方を換えると、プロセスとしての〈わたし〉が形成されてくるのですが、そのプロセスを媒介する何かを置いてやらなければいけない。そして、私たちは、取り込まれるだけではなくて、自らがそのプロセスの主体になって、変化し続ける〈わたし〉をどうつくり出していくのかを考えなければいけなくなっているのではないのでしょうか。そういう意味では、ある種の〈わたし〉を生成するプラットフォームのようなものを考えていく必要があります。

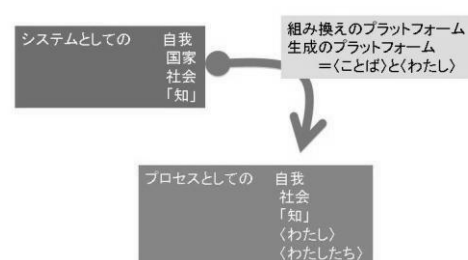


図 11

これは、うまく描けなかったのですが、こんな状態です。従来は、上から下への伝達のモデルがあったはずですが。図 12 のようなモデルがあったとすると、それが解体していくので、それに替わって、生態学的にというか、プラットフォームの上で

「知」が発生して(図 13)、さらに〈ことば〉が発生し、「知」が発生するという形で、時系列で見ていくと上から下へというのが定番かもしれませんが、それが下から上へ、そして横へと移動してもいいというあり方が生まれる必要があるのではないかと(図 14)。そして、この過程でいろいろなリソースを流動的に活用していきながら、〈わたし〉をつくっていく(図 15)。「わたし」が形成されて、自己がフローしていくような形で(図 16)、さらに新たに転換していくような〈わたし〉(図 17)、このような形で展開していく、こういうイメージです。

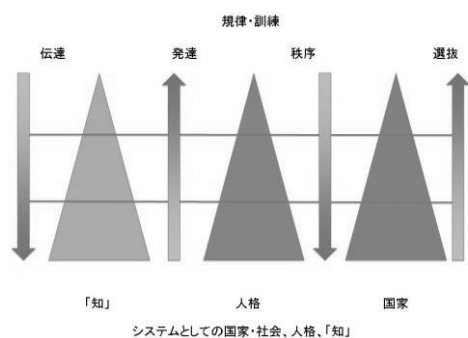


図 12

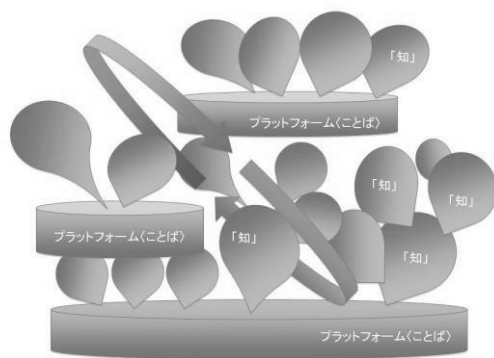
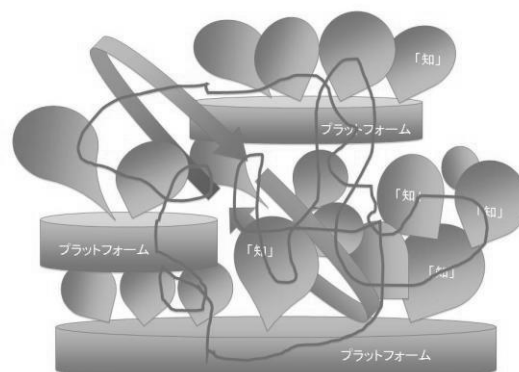


図 13



流動的なリソースの流動的な活用と自己の生成

図 14

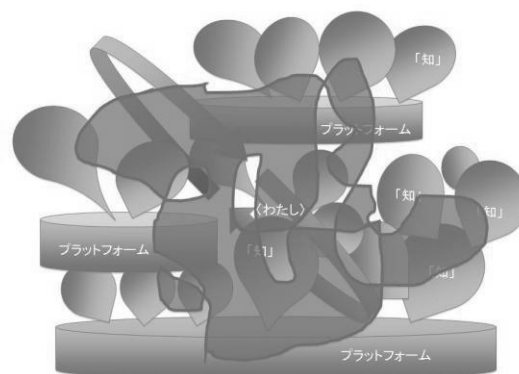
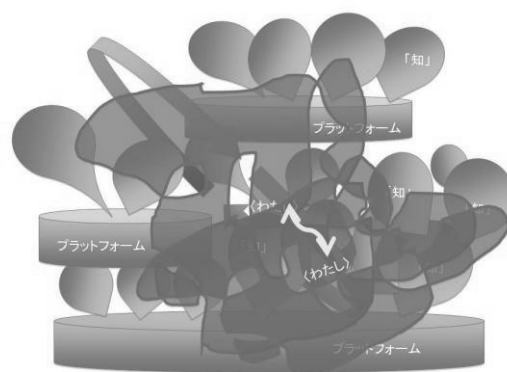


図 15



自己の流動的(フロー)な生成

図 16

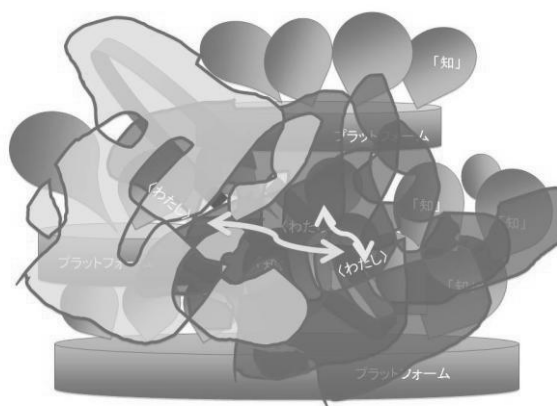


図 17

〈ことば〉による二重の受動性

現在、生涯学習で強調されているのは、例えば無意識というものをどう扱うのかということです。その無意識は前景化するといういい方をします。

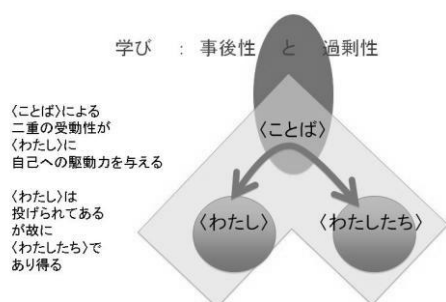


図 18

この過程で、〈ことば〉をどう扱っていくのか。先ほど私は、〈ことば〉を〈わたし〉のものでありながら、〈わたし〉のものではない、社会のものだといいました。〈わたし〉が〈ことば〉を使うということにおいて、〈わたし〉は受動的です。〈わたし〉は〈ことば〉を与えられて存在し、〈わたし〉を認識しようとする時点で、既にその中には他者が入り込んでしまっている。〈わたし〉は二重の意味においてこの社会に投げられてある。他者へと投げられてそこに存在している。だからこそ〈わたし〉は〈ことば〉を使うことによって、自分の過剰性を意識すること

ができ、その意識した過剰性を使いながら、他者との共存関係に入ることができる(図 18)。

そして、そのときに他者との共存関係そのものが〈わたし〉として形成されていくような関係、だから〈わたしたち〉は〈わたしたち〉でありながら、〈わたし〉であるという関係をつくることができる。そして、その中で〈わたし〉という存在をきっちりとそこにまとめ上げていくことができる。そのような関係をどうつくり出していくのかということが問わなければならないのではないのか。(図 19)

さらにいうと、〈わたしたち〉は〈ことば〉を使うのですが、実は〈ことば〉は事前に決まったものでしかないのです。つまり、私たちは〈ことば〉でいえることしかいえないのです。ですから、私が今お話していることは、前もって何といおうかというのは大方決めています、ここで今、皆さんに出会っているという具体的な場面に立ち会って、実際に具体的な話をしてみないと、実際に私が何をいつているのか、自分でもわからないのです。事前に規定されているのに、事後的にしかわからない。事前には、自分が何をいいたかったのかわからないけれども、事後的にわかる、そのわかるというところに皆さんが関係する。ここでは、〈わたし〉が皆さんを経由して、事後的に自分に返ってくることによって、さらに次に行こうとしてしまうという過剰性が生まれるという関係が形成されているのです。

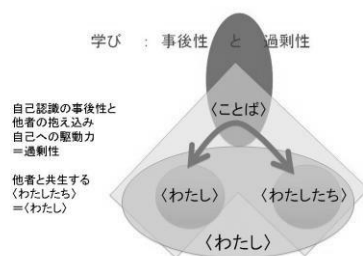


図 19

〈ことば〉を使うことによって、「事後性と過剰性」

という問題が起こる。それを学びとしてどう組織していきながら、子どもたちが変わっていくプロセスとして、自己つまり〈わたし〉をどうつくり続けるのか、このことを考えなければいけないのではないかと受け止めています。

こういう形で、どんどん展開していってしまう私たちというものが本来あるはずなのです。その過程で抑えきれない〈わたし〉をどうするのかということが大きな課題になっていき、さらにその中で子どもたちが息苦しさを感じているとしたら、この方向性をどうとらえていくのかということを、考えなければいけないのではないのでしょうか。

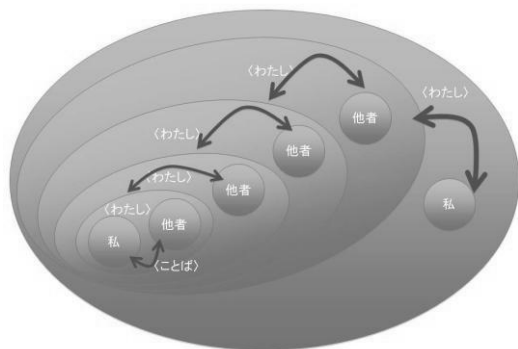


図 20

この過程を、〈わたし〉を中心に描くと図 20 のようになりますが、当然、他者も同じようなことをしている、これはどんどん重なっていくという、図 21 のような関係になっていくと思います。

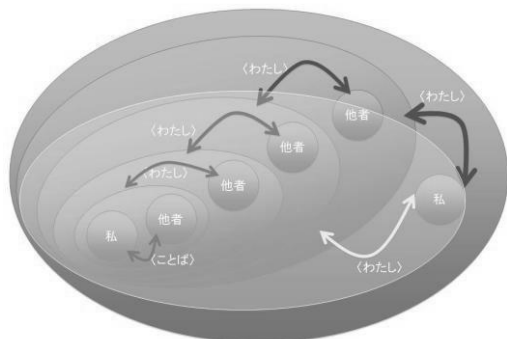


図 21

生成し続ける自己と学び

私たち自身はフロー化していく。常に〈わたし〉がここにいる、あるものを身につけて、つまりストックで、成長・発達するのではなくて、常に変化をし続けながら、〈わたし〉は他者とともに〈わたし〉としてそこに存在するのだという形で、そこにあり得るのではないかと(図 22)。こういう形で〈わたし〉を考えていくと、そのときの学び、さらにそこにおけるカリキュラムはどうあるべきなのか、これをこそ私たちは考えていかなければいけないのではないかと思います。

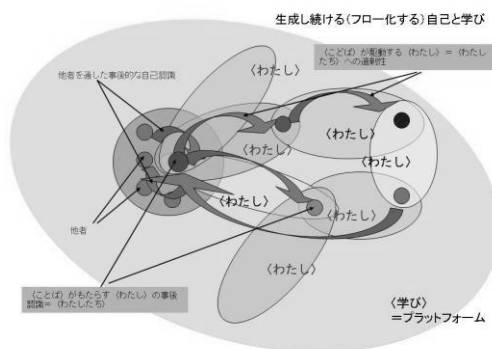


図 22

〈ことば〉が発動する〈わたし〉、〈わたしたち〉へと〈わたし〉を展開していきながら、そこから〈わたし〉が過剰に返ってくる。その過程で、〈わたし〉というものを、自己認識を繰り返しながら、さらに次に展開していこうとするような〈わたし〉がそこに形成されてくる。このような関係をどうつくり出していくのかということです。従来、私たちが問うてきたのは、「知」の分配へのアクセスの「平等」をどうするのかということでした。しかし、アクセスが平等であればあるほど、実は競争が激化していき、自分が〈わたし〉でなくなってしまうということが起こってきています。

その中で、そこから離脱する、または自己を認識することが困難である若い人々、さらに社会構成も実はそうしたものを求めなくなってきたよ

うな社会の経済や消費のあり方が前景化してきています。この過程で、ある意味で新しい自我が形成されてくるのかもしれませんが。そうだとすると、そこでは、改めて「知」を生成していく、いい方を換えると、〈わたし〉自身を生成する「自由」をどこで保障しあうのかということを問わなければならなくなっていくのだと思います。

もう少しいつと、「わたし」を所与のものとして、それを前提に教育を考えるのではなくて、〈わたし〉をつくり出していくことを前提に、教育を考えていくような時代に入ってきたのではないかということです。

システム(ストック)からプロセス(フロー)へ

それを、最初のテーマであった「市民性」から考えていきます(図 23)。従来は、帰属することが市民性の前提だったはずですが。さらにそこから参加を求め、参加によって社会を変革することを求めてきました。今は、さらにそこから、生成することがとらえられなければならないようになったのではないのでしょうか。ですから、自我が一貫した〈わたしたち〉がそこに存在するのではなくて、むしろ生成し続ける〈わたしたち〉がそこにあること、そして〈わたし〉をつくり続けることを保障しあうような関係の中で、社会の構成をどうとらえていくのかという議論をしなければならないのではないのか。その意味では、従来のストック・システム、蓄積していく社会からフローな社会へと流れ出していく社会の中で、どうやって〈わたし〉をつくり続けながら、〈わたし〉は〈わたし〉であると思えるような仕組みをつくり出していくのかということになるのではないかということです。

生涯学習から見た市民性:

単一のアイデンティティをもつ
近代産業社会＝近代国民国家への帰属
＝ストック・システム



権力関係を可視化し、社会への参加によって
多様な利害と権力のダイナミクスの行使をとまなう
政治主体としての市民



〈わたし〉の生成の「自由」を保障し合う
相互承認というプロセス
＝フロー

このプロセスを保障するためのプラットフォーム
＝〈ことば〉による自己への駆動力の生成

図 23

ですから、社会そのものが現在、システム(ストック)からプロセス(フロー)へ移行しようとしている過程で、個人はどうあるべきなのか。それは例えば、「I position」といい方をしますが、多重化していく〈わたし〉があちこちにありながら、それをきっちりにとらえておく〈わたし〉という、ある意味でメタ自我またはメタ自己のようなものを生成していく。そして、それを規定しているのは、実は〈わたし〉が他者から社会に投げられてそこに存在しているという受動性である。そして、その受動性をとらえながら、〈わたし〉と他者との関係を〈ことば〉を媒介にしながら、〈わたし〉の過剰性を駆動していくようなあり方へとつくり変えていく、こういうことなのではないかと思います。

こういう〈わたし〉をどこで生み出していくのかということが、例えば教育または学習の課題になっていくのではないかと考えているところです。

ですから、ここでも繰り返しになりますが、〈わたし〉が〈わたしたち〉として社会に存在することによって、〈わたし〉であり得ることをどう実感させながら、新しい〈わたし〉をつくり出す、つくり続けていくことを若い人たちにどう保障するのか、変化し続けているけれども、それは〈わたし〉なのだという感覚を強く持ちながら、社会のフローのシステム

を使いこなせるような力を若い人たちにどのようにつけていくのか、考える必要があるでしょう(図24)。

個人は、他者性を抱え込んだ受動性として、
過剰に自己を生成せざるを得ない(わたし)となる

〈わたし〉が他者を媒介して〈わたしたち〉となるとき、
〈わたし〉は〈わたしたち〉として〈わたし〉への
駆動力を獲得する=「知」の生成

問われるべきは、この駆動力の方向性と
この方向性を操作し得る自己と他者との関係性

この関係性を我がものとする、つまり意識化できる力をつけること
これが新しいカリキュラムのイメージとなる

図 24

私たちは今、生涯学習の分野で、子どもではありませんが、失業された方々に対するセミナーなどを通して、次のような知見を得ています。スキルを教えてもほとんど意味がないのですが、セミナーで、社会の構成や人とは一体何であるかという、より本質的な議論をすることによって、受講者は私たちとの対話の中で自己発見をし、自己を組み替えていく力動性がとらえられているのです。こういうものをどう組み込みながら、社会がどんどんフローになっていく時代において、主体としての子どもたち、または私たち自身がそこに存在するということをどう保障するのかを考える必要があるのではないかと思います。

生涯学習を胡散臭いといった院生その当の本人が、フロー化する〈わたし〉をとらえあぐねて、呻吟しているのではないのか。私にはそう思えてなりません。所与(さがすこと)ではなく、生成(うみだすこと)こそが課題化される必要があるのでしょう。

「リテラシーの形成—目標とカリキュラム—」

藤村 宣之(教育内容開発コース)

はじめに

心理学の視点から、それぞれの教科の指導法や学習方法、カリキュラムの問題を考えています。

今日は「リテラシーの形成」ということで、新しいカリキュラムの在り方について、特にフィンランドの教科書の分析などを通じて考えたいと思います。

日本の子どもの現状:学力調査から

PISA 調査で、学校で学習した知識・技能を日常場面に活用する能力を測るリテラシーが、数学、科学、読解の各側面で低下してきていると指摘されています(図1)。

日本の子どもの現状:学力調査から

・PISA調査(2000, 2003, 2006)

学校で学習した知識・技能を日常場面に活用して問題を解決する能力(リテラシー)が、数学、科学、読解の各側面で低下傾向。関心は常に低い。

・PISA, TIMSS, 全国学力・学習状況調査の分析

①日本の子どもが得意な内容:「できる学力」

手続き的知識やスキルの適用、事実に基づく知識の再生
定型的問題解決、選択肢に対する判断

②日本の子どもが不得意な内容:「わかる学力」

概念的な理解(知識の関連づけを通じた本質の理解)
非定型的問題解決、考え・解法・理由などの説明

図 1

それをもう少し心理学的に分析すると、実はPISA という課題の中でも、日常的な文脈を与えられているのですが、解き方が一つに決まるような定型的な問題と、自由記述でいろいろな解答、いろいろな考えを表現できるような問題が含まれています。そういうものをトータルに全国・学習状況調査なども含めて分析すると、日本の子どもが得意なのは「できる学力」とまとめられます。これは、一定の手続きやスキルを適用する、知っている事実を再生するというものです。解き方が一通り定まるものを定型的問題と呼びますが、それを解決する、あるいは選択肢に対する判断を行うということです。それに対して日本の子どもは、知識を自由に関連付けて、日常経験やほかの教科で学んだこともつなげて考えて本質を理解していくような力や、それが反映されるような、解答が多様にある